

# 日本地衣学会 ニュースレター

## No.124

Newsletter from the Japanese Society for Lichenology

目次	会員通信	461
	雲南地衣類調査行2014(その1) / 原田 浩	461

### 会員通信 *From Members*

#### 雲南地衣類調査行 2014 (その1)

*A field trip for lichen study in Yunnan, China, 2014 (Part 1) / by Harada H.*

>>>>> 原田 浩: 千葉県立中央博物館

#### 昆明到着

2014年4月15日夜、空港で出迎えてくれたのは、いつものとおり王さん(王立松, Wang Li-song, ワン・リーソン)のにこやかな笑顔, 5年ぶりだ。王欣宇(Wang Xinyu, ワン・シンユー), 劉棟(Liu Dong, リウウ・ドン)の二人が居たのはいつもと違った。それと、この昆明国際空港は5年前には無かった。

王さんの運転する車で昆明市の市街地に移動し、真っ先にしたことと言えば・・・そう、食事。しかも雲南と言えば、米線(ミーシェン)という米の麺(図1)。雲南の人が省外から帰って来たときにはまず米線を食べ、帰ってきたと実感するのだと、以前、王さんが言っていたのを思い出した。私にとっても雲南の食べ物と言えば米線と言えるかもしれない。実際、これまでの雲南滞在中はほとんど毎日朝食は麺類だった。米線のプリッとした食感は独特で他では味わったことがない。雲南には麺の種類が多いが、その中でも私はこれが一番好きだ。



図1. 雲南といえば米線



図2. 植物標本館の入口に掲げられた2つの看板。左は「中国科学院昆明植物研究所植物標本館」、右は「中国科学院东亚植物多样性与生物地理学重点实验室」。

## 5年前とは・・・

翌16日はホテル近くで朝食（もちろん米線）をすませ、王欣宇氏に中国科学院昆明植物研究所まで送ってもらう。植物標本館の建物は5年前と変わりなかった。ただ、入口には、「植物標本館」の看板と並んで、「東亜植物多样性与生物地理学重点实验室」の看板（図2、右）がかかっていたことが違っていた。

この建物の一角に王さんの勤める隠花植物標本館がある。ここも変わらないように見えた。しかし、大きな変化があった。5年前はスタッフは王さんと、助手らしき女性1名のみだったが、今回は、王さんに加え、研究スタッフとして王欣宇氏が正面のデスクに居た。また、標本室脇の閲覧スペースには劉棟氏に加え、大学院生数名と学部生1名が並んで座っているのだ。長い間ずっと地衣類一名だった隠花植物標本館には、さらに蘚苔類のスタッフも加わっていた。

王欣宇氏のことは知っていた。2007年の調査の時に王さんとともに彼の父親も同行していた。息子の王欣宇は地衣類を勉強しており、韓国の順天大学のHurさんのところに留学する予定だと聞いたような気がする。2009年の地衣学会大会に彼はHurさんとともに来日し、発表をしていた。今回の来日前の様々なやりとりは主に王欣宇氏と交わっていた。

王さんは、今は標本館とともに、入口の看板にあったように「東亜植物多样性与生物地理学重点实验室」にも所属していた。複数の研究プロジェクトを動かし、

そのマネージメントと若手・学生の指導が彼の仕事となっていた。そのプロジェクトの一つが今回の調査と関係あった。それは「Floristic and Biogeographic Study on Lichens from Arid Valley of Jinsha River [金沙江乾燥谷（中国雲南省）における地衣類のフロラと生物地理学的研究]」、今年1月に始まり2017年12月末までの4年間続くビッグプロジェクトなのだそう。その一環として、今回私が招聘されたということなのだ。

## きびしい調査となりそうな予感

私にとって雲南の調査は、早いもので今度が7回目にあたる。このうち2回目の2003年の調査から、本誌に調査の様子など紹介をしてきた。30号の「雲南地衣類調査行2003」以来、ナガサルオガセ、カプトゴケなどの大型地衣が繁茂する写真を度々掲載したので（例えば33, 39, 51, 70, 77, 81号）、雲南に対してそのような場所だという印象を持たれている方もおいでだろう。

しかし今回は全く違う。

プロジェクト名には、Arid Valley of Jinsha Riverとある。金沙江[長江（つまり揚子江）の上流]に沿った谷がとても乾燥しているということなのだ。2010年の3月から5月にかけて千葉県立中央博物館で企画展示「雲南の地衣類」を開催したときに、解説パネルを作ったので、それを使って説明しよう（図3）。



図3. 雲南省の三江併流地区における地形が山脈には湿度を、谷には乾燥をもたらす。下図は、上図の貢山・シャングリラ間の地形断面模式図。インド洋からの湿った風はミャンマーを越え、山脈（高黎貢山）に多量の水分をもたらす。更に怒山、雲嶺を越えるたびに水分は失われていく。

ヒマラヤ山脈の東の端に位置する雲南省の北西部では、山脈が南北に走っており、川も北から南に流れている。長江（雲南省内での呼び名は金沙江）、メコン川（瀾滄江）、サルウィン川（怒江）の3つの川が、狭いところでは100km 足らずの間に配置しているこの地域は、「三江併流」と呼ばれ世界自然遺産にも登

録されている場所である。川を隔てる山脈は概ね標高4000m ほど、一方谷底は2000m 程度と標高差が大きい。この地域はインド洋からの湿った西風（モンスーン）の影響を受けやすい場所だが、南北に山脈が遮っているため、湿った空気が山脈を駆け上がるたびに霧となり雲となり降水をもたらす。山脈を越える毎に

空気は乾燥していく。山脈から谷に降りる風は、フェーン現象によって暑く乾燥するのだという。金沙江の谷は一番東側にあるので、最も乾燥した環境となる。私自身も、これまでの調査でそれを十分に実感していた。

雲南省北西部の三江併流地区の金沙江の谷は、私も何度か通過し、また多少とも地衣類の調査をしたことがあった。麗江からシャングリラに行くときには必ず金沙江を渡り、またシャングリラから白馬雪山方面に行くときにも再び金沙江を渡るのだ(図3)。しかし今回は、そこではないという。この地図では、金沙江は中ほどで大きく蛇行した後、東に向くが、更にその東、昆明の北なのだという。

今回の調査ルートをご覧いただこう(図4)。雲南省の中央部やや東よりに位置する昆明から、まず、北に流れる普渡河(金沙江の支流)に沿って北上し、次

いて四川省との境を流れる金沙江本流の谷、そして西側を回って昆明に帰るルートである。

次はいよいよ調査の様子を報告だ。(つづく)



図4. 雲南省と調査ルート。

### ●複製される方へ

本誌に掲載された著作物を複製したい方は、許諾を受けてください。詳細は本誌 102号 378ページに。

### ●Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission. For details, see No. 102, p. 378 of this publication.

●*Newsletter from the Japanese Society for Lichenology*, no. 124, pp. 461-464: eds. Kinoshita K., Komine M. & Harada H., published by *the Japanese Society for Lichenology*, 20 May 2014.

日本地衣学会ニュースレター 124号

発行日：2014年 5月20日

編集：木下 薫・小峰 正史・原田 浩

発行者・発行所：日本地衣学会

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3-35

関西大学 化学生命工学部 生命・生物工学科

微生物工学研究室

©2014 日本地衣学会 (© 2014 The Japanese Society for Lichenology)

本誌記事の著作権は日本地衣学会に属します。無断転載・無断複製等は固くお断りいたします。